

### 第3回（仮称）都市のランドデザイン有識者委員会 議事概要 まとめ

#### プレゼンテーション

横田 樹広 委員

「緑の恵みと景観から考える練馬区の30年後」

- ・都市緑地法の改正などにより、市民にとっての緑地の価値の観点から都市のみどりを維持・保全し、そこに都市農地を位置付けるという動きがある。
- ・区民が大切にしたいみどりは、公園・街路樹の割合が高い。行政が整備するみどりには非常に満足しているが、それ以外のみどりに対する思い入れが低い傾向にある。
- ・農・住混在の魅力をみどりの量だけでなく質として感じ、新しく創出するみどりを愛着が持てるように機能として位置づけることが大事。
- ・みどりの「恵み」をいかに人々に対して「見える化」して、質的に拡充できるかが重要。
- ・みどりの空間形成の在り方は、地区毎に検討し、地区別の「恵み」を指標とした目標設定をして、適切な配置を検討することが望ましい。

#### （質疑）

- ・公園に民有地の農地を組み込んで、それを公的なスペースとして確保することが財源上も可能となれば、公共空地の整備の中に民有緑地を組み込むことができる。
- ・市民との協定によって、協定型の農地として公園的に利用することは、土地所有の如何に関わらず促進すべきことだと考える。
- ・EUではグリーン・インフラ戦略というものがあり、生態系ネットワークを基盤として、みどりの多面的な機能に着目して保全する計画がある。
- ・循環型都市づくりでは、生態系を広域的な視点で考える必要があり、都市の立地や立地特性に応じた緑地の特性付けなど、あるいは居住のあり方をネットワークにとらえて、みどりの循環における位置付けを考えていければ良い。
- ・区の東部地域ではみどりの変化を感じることはないが、西部地域では農地が開発され住宅ができてみどりが減少していると感じる。
- ・生態系サービスは「恵み」であり、受益者があって成立する。みどりが豊かであってもその「恵み」を得られなければ存在するだけとなる。「受益者」というのがキーワードであると考える。

## プレゼンテーション

瀬田 史彦 委員

「高齢化・人口減少社会の都市計画～地域単位と拠点の設定に注目して～」

- ・ 高齢化や人口減少が進む中で、地区間の格差が大きくなっていくため、都市計画あるいは空間計画の地域単位をどう設定していくかが重要、また変えていかなければいけない部分だと考える。
- ・ 地区間・コミュニティ間の格差は、是正する主体が無いところか、格差を放置あるいは是認するような動きも見えている。
- ・ 生産緑地が解除される場所では、みどりの維持との兼ね合いがあるが、若年層世帯を迎え入れる対策を考えることも必要。
- ・ 地域単位での拠点の設定というところが非常に重要。公共施設の再編はインフラや市街地の再編よりも先に進み、大きい拠点に集約されるような動きとなる。
- ・ 通勤世帯のニーズを特に考えながら、多くの区民の意向や行動を読み解き、都市構造図をどのような形で高齢化に対応させていくかが重要。

### (質疑)

- ・ 宅地化の余地がまだある地域は高齢化率が調整され、例えばファミリー層が新しく入りこむ余地がないところが高齢化し、地域差が広がる傾向があるのではないかと考える。
- ・ 団地のように一度建て詰まって、しっかりとした基盤ができて人々が住み続けるようになると、新しい居住者が入らない状況となり、高齢化する傾向がある。
- ・ 地域によって高齢化の度合いが異なると、全体として高齢化格差が広がるのではないかと考える。
- ・ 練馬区では将来人口を比較的平穏に考えているが、社会移動をどうみるかによって高齢化や人口減少が非常に特異な形で見えてくる。社会移動を抑制する施策も考えておいた方がよい。
- ・ 少し遠い将来を見据えてしっかりとした都市計画を行い、みどりや都市基盤を整備するとともに、区内にある程度しっかりとした拠点を形成する方がよい。

## プレゼンテーション

小泉 秀樹 委員

「練馬の未来と都市計画のコレカラ」

- ・高齡化が進んだ場合、夫婦と子どもという世帯はマイノリティになり、単独世帯が圧倒的になる。高齡化が進むと、働く人が減る社会になり、地域で暮らす人が相対的に増える社会と見るべき。
- ・どのような暮らし方なら、持続可能で、社会的包接で、経済的に成り立つのかを、都市計画や都市デザインの観点からも発信すべき。
- ・外環の2を含む都市計画道路の整備では、道路をパブリックライフの舞台にするような発想を積極的に取り入れることが必要。
- ・幹線道路は、グリーンインフラストラクチャーとして、公共交通も通り、人々がアクセスし易く、沿道の地域づくりを一緒に進めることが大事。さらに、幹線道路の内側の住宅地をどうしていくのかが、他の自治体の競争を考えると極めて重要。
- ・今後の都市計画で重要なものは、様々なデータを活用し地域の価値を高めること。さらに、従来の枠に収まらない様々な役割を果たすために、協働のフレームワークのような役割が求められる。

### (質疑)

- ・市街地の縮退、スポンジ化という流れの中で、住宅地の在り方そのものが重要だという話は、練馬区に相応しいと考える。
- ・圏域の考え方はテーマによって異なり、練馬区全体で考えるべきストラクチャーも、同様に駅前や幹線道路の整備も大事。一方で、住宅地を考えると、都市計画マスタープランの区域区分では単位が大きすぎると感じる。第2回委員会での小学校区ぐらいで考えるべきとの話に賛同する。
- ・近隣住区論は日常的な生活圏をベースに発想されていて、今の時代にも合理性があり、空間の形態や求められる範囲は異なるが、計画の単位としては有効である。
- ・埼玉県内の自治体では、2万人程度の範囲で地域内の要介護認定者がどれだけ増えそうか、空き家がどれだけ増えそうかを大まかに把握し、施設需要の予測を都市計画マスタープランで行っている。道路や公園だけでなく、必要な機能や社会的なサービスを地域の中に誘導していくことを、空間計画のセクションである都市計画課が担っている。
- ・これまでは大きなものを作るのが都市計画で、100年の計ということであったが、練馬区では地域毎のまちづくりを30年続けることで、他の地域と質の違う住宅市街地が形成できるのではないかと考える。